同一念仏の地平

秦　治人

一

浄土真宗の宗教的地平に於いて何よりも顕著なことは罪悪の凝視ということであり、またその罪悪の凝視と呼応して開顕せられる平等の大悲心ということである。即ち、衆生と如来の因縁を本願の教えに開き、その因縁の感知において浄土教救済の世界をうなづくということである。罪悪生死という人間の絶対の現実に則しそこから目をそむけることのない凝視の眼にのみ苦悩の衆生を平等に摂取するという如来の平等の心を感知するのである。そしてこの因縁を感得するすがたが念仏者として行ぜられていく。

弥陀智願の広海に　凡夫善悪の心水も
帰入しぬればすなわちに　大悲心とぞ転ずなる（『正像末和讃』真宗聖典　五〇三）

人間の意味とその存在の使命を満足せしめるものは決して人間のそれ自身の能力や価値からは開かれない。如来との因縁に於いてのみ開かれるのである。そこに道徳的、倫理的世界との根本的相違がある。罪悪生死、善悪の衆生の現実をもって人間が本願にふれるとき、老少・善悪を簡ばず、罪悪を共に悲しむ世界を感ずることが出来る。善悪を簡ばざる平等の世界を仰ぐ念仏者と転ぜられるとき、もはや善悪を論ずることは許されない。本願他力に証せられる念仏者の世界は『御消息集』（善性本）第七通に第十一願、真実証をあげて

正定聚に、信心の人は住し給えりとおぼしめし候いなば、行者のはからいのなきゆえに、義なきを義とすと、他力をば申すなり。善とも、悪とも、浄とも、穢とも、行者のはからいなきみとならせ給いて候えばこそ、義なきを義とすとは申すことにて候え。（真宗聖典　五九三）

と述べられている。このように念仏者の真実の証しとは、まさしく本願の教を聞き善悪の義を離れた真実信心の人となることにおいて、「真の仏弟子」と言われ、また「金剛心をえたる人」とも呼ばれる。

かくして、念仏者として誕生してくるその宗教生命をあらわすものが、金剛心の行人であり、その宗教的主体は正定聚の機といわれる。念仏者はその内なる精神より言えば如来の金剛の真心であり、その如来の願心成就の金剛心の行人ということが念仏者である。無論この金剛心は善導のことばを直接うけているが宗祖はこの金剛心を展開して、真実信心の内に満足する利益と、その信心の源泉である大信海の展開を「信巻」に「現生十種の益」とあらわし、つづいて

しかれば、願成就の一念は、すなわちこれ専心なり。……真実信心すなわちこれ金剛心なり。金剛心すなわちこれ願作仏心なり。願作仏心すなわちこれ度衆生心なり。度衆生心すなわちこれ衆生を摂取して安楽浄土に生ぜしむる心なり。この心すなわちこれ大菩提心なり。この心すなわちこれ大慈悲心なり。この心すなわちこれ無量光明慧に由って生ずるがゆえに。願海平等なるがゆえに発心等し、発心等しきがゆえに道等し、道等しきがゆえに大慈悲等し、大慈悲はこれ仏道の正因なるがゆえに。（真宗聖典　二四一・二四二）

と示している。ここには信心成就をそのもとにたずね、如来の心、大慈悲心へと帰し、願海平等より等しく発った心であるが故に、その平等なる如来廻向のたまわりたる信心を成就して願生道に帰する者は道等しく平等一味の世界を開顕する。そこに如来の誓をもって生きる念仏の行者の内面が言い当てられている。念仏者とはかかる金剛心の行人なるが故に、「真仏弟子」であり「この信・行に由って、必ず大涅槃を超証すべき」身として定まるのである。

第十八願成就の信行というも、金剛心において、超証せられる大涅槃の内容を既に言い当てている。不退転とは「すなわち正定聚のくらいにさだまるとのたまう御のりなり。これを即得往生とはもうすなり」（『唯信鈔文意』真宗聖典　五五〇）と言われたときの往生人の内容とは涅槃を超証する身として決定せられた者である。信心獲得によって、涅槃を超証すべき、正定聚の機として誕生し、再び二十五有の迷いに沈淪していくことのない不退の人である。既に浄土の真実功徳、滅度、涅槃の働きが現生の煩悩具足の身へと将来し、その身において念仏者は涅

槃を行ずる者でなければならない。本願成就による涅槃の働きとは共なる平等の世界として涅槃を行ずる身へと転成させるものである。人間の生死は転成せられる身として絶対の意味をもつのである。煩悩の身・具縛の凡愚であることのうなづきの上にかえってその具縛を解放して涅槃道へと転成せしめる平等の大悲が確信せられる。いわば存在の根拠・人間の依って立つ宗が転依せられたのが「念仏成仏是真宗」の宗教的地平であり、そこに念仏者として誕生していく場所が与えられる。依って立つ唯一無二の場所が念仏成仏の願生道として決定的に自己に於いて選びとられ、その選びに於いて仏願力によって決定せられ、自己が回転せられていく。その時の念仏者と言っても単に我一人の道を行くのでない。願海平等の大信海に等しく帰入すべき身が、ひとしく開かれていることを一切衆生の上に同信してゆくのである。即ち、一乗海といわれるように誓願一仏乗の世界を唯一開くものは、どこまでも信心に於いてその誓願一仏乗を聞信していく所に領解せられる。その信念こそがどこまでも願海平等をうなづくのである。

「聞」と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを「聞」と曰うなり。「信心」と言うは、すなわち本願力廻向の信心なり。（「信巻」真宗聖典　二四〇）

と言われる如く、聞に於いて開かれる信心であり、疑なき信に於いて行ぜられているものが念仏の行である。

本願を疑わない信はそのまま念仏、即ち、「称無碍光如来名」の大行といわれる浄土真実の行である。念仏は即ち称名念仏として「本願を信じ念仏申す」という「ただ念仏して」ということに外ならないが、しかし、その具体的行は、個人的信念、自覚に止まるのでなくあくまでも、一切衆生とともに平等を体していく念仏者にある。同一念仏の成仏道は大乗菩薩道を背景として又志願するのである。それは名号を体とし、如来に住持せられるところの浄土の聖聚、友をたまわっていく道である。同一念仏に於いて、唯一無二の平等の人間関係をそこに仰いでいく身へ転ぜられていく世界である。そして現実の存在の具体的事実の上でそのことを確かめていくのである。いま本願文にかえってみれば「聞其名号、信心歓喜、乃至一念。至心回向。願生彼国、即得往生、住不退転。唯除五逆誹謗正法」を『唯信鈔文意』には

『大経』には、「願生彼国　即得往生　住不退転」とのたまえり。「願生彼国」は、かのくににうまれんと

ねがえとなり。「即得往生」は、信心をうればすなわち往生すという。すなわち往生すというは、不退転に住するをいう。不退転に住すというは、すなわち正定聚のくらいにさだまるとのたまう御のりなり。これを「即得往生」とはもうすなり。「即」は、すなわちという。すなわちというは、ときをへず、日をへだてぬというなり。(『唯信鈔文意』真宗聖典　五四九)

と釈される。正定聚の内容はそのまま大涅槃を内に宿し、その世界を開示している。更に『唯信鈔文意』に見れば「ようよう、さまざまの、大小聖人、善悪凡夫の、みずからが身をよしと思うこころをすて」とあり、要するに現実の社会的立場や、我々の善悪の差別意識を廻心して、「ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類」という身の上に「無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信楽すれば、煩悩を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり」と示される。煩悩にしばられている、その身、そのままにおいて人間の生の事実が本願を信じただ念仏するという、その信楽の一念に於いて、大般涅槃へいたる身へと転成せしめられる人となる。それ故に「能令瓦礫変成金」、りょうし、あきびとという具体的生活者の具縛のいのちに「変成金」すなわち、無上大涅槃へと転ぜしめられていく身を信楽の一念の内容として与えられる。

信楽の一念に於いて定まる正定聚の位いというも、その信心の行者に内包せられる、心至滅度、涅槃への超証を開いており、従って滅度の果が具体的人間の生活の中に確信せられているということにおいて積極的なものである。即ちそれは人間の生きる大地とその意味を、根底より転成せしめて、その未来を涅槃として現在の念仏者の信のうちに顕彰してくるものである。

従って「りょうし・あき人・さまざまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。如来の御ちかいを、ふたごころなく信楽すれば、摂取のひかりのなかにおさめとられまいらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたまうは……」と述べられる如く、信心獲得の念仏者の身に証しされてくるものは、涅槃道であり、具体的には、「いし・かわら・つぶて」の如く生きる身として、われらの現存が確められる時に、かえってそれぞれの業縁の差別的現実を入涅槃へかえしめていく平等の地平に立たしめるということでなければならない。

信心をえたる人はかならず正定聚のくらいに住するがゆえに、等正覚のくらいともうすなり。……補処の弥

勒とおなじくらいなり。弥勒とおなじく、このたび無上覚にいたるべきゆえに、弥勒におなじとき給えり。……しかれば、弥勒におなじくらいなれば、正定聚の人は如来とひとしとも申すなり。浄土の真実信心の人は、この身こそあさましき不浄造悪の身なれども、心はすでに如来とひとしければ、如来と申すこともあるべしとしらせ給え。……「信心の人はその心すでに浄土に居す」と釈し給えり。居すというは、浄土に、信心の人のこころ、つねにいたりというこころなり。これは弥勒とおなじくということを申すなり。これは等正覚を弥勒とおなじと申すによりて、信心の人は如来とひとしと申すこころなり。(『御消息集』(善性本)第五通真宗聖典　五九一)

また『浄土和讃』にみれば、

真実信心うるひとは　すなわち定聚のかずにいる　不退のくらゐにいりぬれば　かならず滅度にいたらしむ

とあり、第十八の念仏往生の選択本願の信心成就において開かれる証、「必至滅度」の果を、信心の成就の因に於いて述べてある。顛倒虚偽の善悪の衆生、具縛の凡愚の上に、その自覚を通して如来の三心即一心の真実の信心が成就するとき、そのまま、正定聚不退のくらいにいり、必ず滅度にいたる者として転成せられることが述べられている。

既に「行巻」に「諸仏称名之願(浄土真実之行選択本願之行)」と標挙して「謹んで往相の廻向を按ずるに、大行あり、大信あり。大行とはすなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、すなわちこれもろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり、極速円満す、真如一実の功徳宝海なり」と示し、大行即ち、称名念仏において善本・徳本を円満し真如一実の涅槃の功徳を廻向せられることが言われる。念仏それ自身が既に真如一実の涅槃の働きであり、その念仏に摂せられ、その念仏の中に一切善悪の衆生が共に帰するという念仏者としての行者となるとき、そこには既に証が涅槃の内容として念仏者の上に見定められている。無論、現生に涅槃を証するというのでなく、煩悩を断ぜずして涅槃分を念仏の上に行じているということである。即ち、念仏者に開かれる即得往生・住不退転の願生道こそが平等を念ぜせしめ、平等に支えられた現実である。念仏の心行の中には如何なる人間的欲求・努力・関心も必要とせず、ただ如来廻向の真実功徳の名号を自己の帰依所とする、そこに金剛心の行人といわれた無漏の願心に支えられた願生者の行がある。それ故に

明らかに知りぬ、これ凡聖自力の行にあらず。かるがゆえに不回向の行と名づくるなり。大小の聖人・重軽の悪人、みな同じく斉しく選択の大宝海に帰して、念仏成仏すべし。（「行巻」真宗聖典　一八九）

と勧めるのである。

二

かくして涅槃を証すべき念仏者であることは、単に一人の道として願生の彼方に涅槃を志念するのでなく、念仏者には人間が互いに人間であることを否定しあわねばならないのが「われら」であるという、その共業の自覚に於いて平等を実証する使命がある。そのようなともどもなる歩みをする人が金剛心の行者である。正定聚の位につきさだまることは、不退転に住するということと等しいと言われたが、その不退とは、あくまでも此土にありつつしかも浄土のともがら、如来浄華衆といわれる如来の正覚を証るべきくらいに定まるということである。それ故に念仏者は如来の正覚に支えられて如来の使命、仏事を為すものである。仏事とは、一切衆生を平等に成仏せしめるという大慈悲の実践である。平等覚がそのまま、平等覚たらしめんとする実践である。それは、正定聚・不退に定まるものの覚悟でもある。入正定之聚とは未来に実現するための段階的位というより未来の働きを現在に於いてその使命として与えられる者ということであろう。不退ということも、正定聚ということも、単に浄土の聖聚が約束され、決定され退かないというよりも、現在に退くことを許されないということである。その大使命が仏の誓いを聞くことによっていよいよ確信せられねばならない。使命を確信した現在は一念のうちに未来によって絶対に満足せしめられている。大涅槃、平等の真如法性の世界はそのまま、現実世界の一切衆生を確固たる根拠として充足せしめているものである。現在の信念に平等が働いているという平等の信念が現在の分の自覚である。衆生の自覚とは平等より開かれた分の自覚である。宿業といわれる自然・必然のうながしに目を開き、分を信知して身を安んずる覚悟こそが、未来を要求する必要のない現在をひらくのである。その分とは既にして大信海より開かれている。信は如来廻向に於いて涅槃の因であるが、その涅槃は平等覚を現在に感得せしめ、その平等覚の実践を念仏の身に於いて使命とさせる。言葉を換えれば、菩薩道の精神を受け法蔵菩薩の精神を本願の行に於いてうなづいていくことである。人間が人間と

しての現在に分を知るとは、法蔵菩薩の浄土建立の魂をかかげ、平等の本願海を己れの帰依所とすることである。

宿業の自覚とは決して苦悩現実の悲歎に終るのでなく、如来の仏事を絶えず具縛の凡愚、いし・かわら・つぶてという生きざまの中に働くことを確認しつつ、その具縛性を平等の実践へと転ずることを志願とする生命へと見直していくことである。いし・かわら・つぶての如くなることの信知は、われらとして生命を互いに奪い合い、人間の人格、尊厳のかけらをも奪い取られていく存在者の厳粛なる事実を共に荷負い、共に「与奪の道なき」又「与奪の名なき」世界を求念し、与奪の道なき世界を浄土と頷づいている。そして浄土願生道こそがいよいよのちあるもの、真に帰すべき真実のいのちと知られるのである。かくして帰すべき平等の道は、「念仏成仏是れ真宗」の願生道としてそこに賜わっている。まさしく「正定聚のくらいにさだまる」が故に真実報土を証しする同一念仏者の道がそこに開かれている。念仏者とは往生の身において平等の本願海を証ししてゆくものである。本願海とは善悪を簡ばない平等の世界である。この平等の本願海を開いている本願の名号を開くところに又善悪の衆生が平等の世界へ到ることが出来る。

弥陀の知願海は深広にして涯底なし。名を聞きて往生せんと欲えば、みなことごとくかの国に到ると。たとい大千に満てらん火にも、直ちに過ぎて仏の名を聞け。名を聞きて歓喜し讃すれば、みな当に彼に生まるることを得べし。(『往生礼讃』「行巻」所引、真宗聖典　一七四・一七五)

念仏者として如来浄土の平等の本願海に心を居す念仏者は善悪の衆生を平等に救わんとする無限の大悲を信念として、どこまでも、現実の歴史的現実の益別の世界を内に破っていくものでなければならないであろう。よしあしと思う心をひるがえして、人間の善悪の判断にのみ生きているその心を本願に帰してゆく。倫理に於いては善悪の心が外に向い、その外なるものに善悪を写し、対象化する為に、それは、差別の現実世界を正当化し、実体化するということがある。倫理のもつ力とは、自己義認への情熱である。それは人間に罪悪の意識を反省させ、人間の不条理なる現実と自己矛盾を知らせるものである。しかしその底には悪を廃し、善を実現せずにはおかないものとして善悪の意識をいよいよ高揚させる。その高揚の心は外に向えば差別の意識とかわらないものとなる。人間の差別とは、人間が自己の根拠に「さるべき

業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」という業縁存在であることの厳しい事実を忘却している証拠である。それは、差別や善悪を超えた本願の真実にふれたとき、やがて、善悪の思いを自然に転成させられるのである。与奪の道、互いに生きる為に生命を奪い合い人格と尊厳を奪い与わざるを得ない「いし・かわら・つぶての如きわれら」として宿業のいのちをひとつに生きる者として気づかれるとき、かえってかかる機の一人一人がひとしく、本願の機として平等の世界を成就する身であると教えられるのである。本願の教を宗とする絶対の機として念仏者が浄土をたまわることにおいて絶対平等の本願海を開いていくのである。ここに

海と言うは、久遠よりこのかた、凡聖所修の雑修雑善の川水を転じ、逆謗闡提恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実恒沙万徳の大宝海水と成る、これを海のごときに喩うるなり。（「行巻」一乗海釈　真宗聖典　一九八）

と示される。

それは更に、相対の善法をくぐって二教四十八対に比校し

しかるに本願一乗海を案ずるに、円融、満足、極速、無碍、絶対不二の教なり。（「行巻」真宗聖典　二〇〇）

とうなづかれている。その教を信受する本願の機は二機十一対をくぐって

しかるに一乗海の機を案ずるに、金剛の信心は絶対不二の機なり。（同上）

と示されるところである。

唯一絶対の真実として私がそこに帰依し宗としてゆける誓願一仏乗を念ずるとき、すべての者が一人一人そのまま絶対不二の機としての同一念仏者の歩みを証してゆく。唯一真実の教が念仏者に於いて絶対不二の信頼関係を見い出してゆけるのである。すべての人を絶対の機として尊敬し、信頼し合える世界が念仏者の歩みの中に行ぜられねばならない。そこに「御同朋・御同行」として共に同じ道を歩む者として、はるか彼方に絶対平等を証する身であることを確信する。それ故に

彼安楽国土莫レ非二是陀弥陀如来正覚浄花之所一化生一。同一念仏無二別道一故、遠通夫四海之内皆為二兄弟一也。眷属無量、焉可二思議一。（『論註』聖全　一―三二五）

と示される眷属無量の世界が仰がれるのである。

三

『論』『論註』に示される荘厳眷属功徳の文は、眷属平等、すなわち本願海における眷属無量の世界をあらわし、浄土教に於ける平等の思想を基本より支える文である。宗祖の平等観、念仏における宗教的世界を考える上では、非常に大きな位置を占めている。宗祖はこの文を「教行信証」の中に三度引かれている。即ち『論』『論註』の引用とともに御自釈の中にこの文の眼目を引いておられるのである。ところで『論註』「上巻」には

如来浄華衆正覚花化生。此二句名二荘厳眷属功徳成就一。（中略）使下我国土悉於二如来浄花中一生、眷属平等與奪無レ路。是故言二「如来浄花衆正覚花化生」一。（聖全一―二九四）

と説かれ、また既に引いた如く「下巻」では

荘厳眷属功徳成就者、偈言如来浄花衆正覚花化生故。此云何不思議、凡是雑生世界、若胎若卵、若湿若化、眷属若干。苦楽万品、以二雑業一故。彼安楽国土莫レ非二是阿弥陀如来正覚浄花之所一化生一。同一念仏無二別道一故、遠通夫四海之内皆為二兄弟一也。眷属無量、焉可二思議一。（聖全　一―三二四・三二五）

と述べられる。宗祖は「行巻」に七祖の釈の引文を引き終え念仏大行を結釈してすぐに先の「下巻」の「かの安楽国土は、阿弥陀如来の正覚浄華の化生するところにあらざることなし。同一に念仏して別の道なきがゆえに」と引かれる。

また「証巻」には、経文の引用に引きつづき、証の内容を『論註』の妙声功徳と主功徳、眷属功徳をもって明らかにし、そこに『論註』下巻の眷属功徳の釈全文を引いてある。更に『真仏土巻』を結釈する御自釈においては「往生と言うは」と言って『大経』の「皆受自然虚無之身無極之体」の文を引き、つづいて『論』の「如来浄華衆正覚華化生」と『論註』の「同一念仏無別同故」の文が引いてある。このように『論』、『論註』の眷属功徳成就の文は、「行巻」「証巻」「真仏土巻」それぞれに、要となる重要なる位置に引文せられる。その他、『入出二門偈』に於いても「如来浄華のもろもろの聖衆は、法蔵正覚の華より化生す。諸機は本すなわち三三の品なれども、今は一二の殊異なし。同一念仏して別の道なければなり。なお淄澠の一味なるがごときなり。」（真宗聖典四六一）と眷属功徳の文が述べられる。

本願の念仏一道こそが唯一無碍の一道として一切衆生

の平等なる地平であり、同一念仏の無碍道は眷属平等の世界を開いている。しかし人間の生の事実は与奪の路としてある。人間の雑生の現実はそれぞれの業をもって互いに人間を奪い、人格を奪い合う関係として成り立っている。決して平等なる間柄とはいえないのが現実である。差別の関係、与奪の関係、それは同一念仏という地平によっていよいよ確かな世界として頷かれてくる。しかしそれ故にこそ、念仏者という新たなる人間の誕生とその間柄において、無上涅槃に至る身という正定聚に決定せられていることの信念は、一歩も現生にたじろぐ事を許さない、かえって現生にあって世の善悪を悲しみ、差別の心を内に見据えていく歩みを始めることを要請する。そこに如来の聖聚としての、正定聚の機としての人間のいのちのいとなみがある。如来正覚を荘厳する浄土における眷属無量の聖聚は既に同一信心の人々の中に写し出されている。すなわち信心の中に如来の浄華衆として人々をたまわってくる。それ故に『安心決定鈔』にはこの眷属功徳の文を引いて「他力の大信心をえたるひとを浄華の衆とはいうなり」と述べてある。無論これは信心の人がそのまま浄土正覚のうちにある人々と同じということではない。信心の人は浄華衆と畢竟等しいということである。すなわち

言二畢竟一者末レ言二即等一也、畢竟不レ失二此等一故言レ等耳。(『論註』聖全一―三三二)

とあるように本願念仏を聞くことが出来た者は現生において浄土の聖聚と等しいことを決して見失わないのである。浄土得生の聖聚と信心の念仏者は畢竟平等であり、すなわち念仏者は「苦楽万品」雑生の分の違いのままに、その彼方に畢竟平等の世界を見定めている。畢竟等しきことを失わざるが故に、念仏者にはすべての人々を友とする世界を開くはずである。それ故に如来正覚に一味となるべき願生者は、現実のただ中にこの現実に苦悩する信人の人、同心の人を御同朋、御同行として如来よりたまわることが出来るのである。

しかして現実に差別と不平等を作り出すものの根源に、その差別の現実を見据える眼をもたないということがある。如来の教に聞信するまなこのみが、その現実を自己の罪業として見出す。そして罪業の信知が平等の法をうなづき感知する。かくして浄土を平等一味のさとりにして与奪の路もなからしめんという誓いの名告りの名号において聞く念仏者達は、浄土願生道に於いて同一に正覚華より化生することを畢竟して確信するが故に、現生の

苦悩の現実にあって、同一念仏の行者として真実の人間関係を果すべく生活せねばならない。

まさしく金剛心の行人、現生正定聚の行者は、必至滅度の大涅槃を果して平等の覚りを成就する身であることの覚悟においてかえって現実の苦悩を見据えるのである。現実を忘却して浄土を夢みるのでなく、同一念仏に開かれる平等の浄土を願生心において生きるとき、その願生心の中に現実を生きる魂として平等の精神をたまわるのである。現実の差別を決して見失わずという、そのことがかえって又すべての人間関係にあって平等であることを見失わないということを裏づけている。同一念仏の上に開かれる四海兄弟とは、四海兄弟という平等の地平を浄土願生心においていよいよ情熱的に期するということである。いわゆる彼土の益として平等を望むのでなく宿業の身の事実において願生心の上に平等への魂を成就する。ともに浄土願生の同一の道において平等を開き情熱的に平等を思念する人間としてここに誕生する者、それが念仏者であると言える。即ち、平等を念ずる念必定の人であると言えよう。

金剛心とはこのような平等の魂をこの歴史的現実の中に証しするものである。それは倫理的人間に於ける関係を超えて真に平等の地平と平等への主体を念仏成仏道に於いて果していくということに外ならない。そこに、果すべき生のきびしさがある。この同一念仏に生きるものの厳しさは、如来の心を我が身にて感得するところのいのちなるが故に厳しいのである。それは、

この世のわるきをすて、あしきことをせざらんこそ、世をいとい、念仏もうすことにてはそうろうに、としごろ、念仏をするひとなんどの、ひとのためにあしきことをもし、また、いいもせんは、世をいとうしるしもなし。（『御消息集』（広本）第五）

と言われる厳しさである。念仏申す人、同一念仏の同行にあっては、世をいとう心は如来の心であり諸仏菩薩の心である。如来の心、如来の悲しみと一つである故に、真に煩悩悪業を悲しみ世を超えて世を悲しみ、人間の罪悪を否定せんとする世をいとう心となる。如来の心なれば互いに人をそしり、悪をなし、人間であることを傷つけ合う、与奪の道を正当化することが許されるはずがない。念仏者は「世をいとうしるし」をもつ。正定聚不退の位、現実に動ぜぬが故にこそ、いのちの果す使命とその重さ、その分限を知ったのである。

願生心に如来の心を賜った人間は、正定聚の不退の位

に於いて分を知るが故にかえって人間の現実の悲しみを知るものであり、いよいよ「世をいとうしるし」を表わすものでなければならない。世をいとう心とは如来の心なるが故に、真に悲しむべきを悲しみ、真に憎むべきを憎む、誠に喜ぶべきことを喜ぶのである。真に否定を知るは如来であり、その賜った心によってのみ念仏の人は世をいとい世を超える魂をあらわす。従ってそれは逃避の心ではない、正定聚の位に定まるものとして分を知ったが故に世の善悪、己の善悪を超え、また宿業を超えて如来の魂に応じてゆけるのである。そのことが

自力のこころをすつというは、ようよう、さまざまの、大小聖人、善悪凡夫の、みずからがみをよしとおもうこころをすて、みをたのまず、あしきこころをかえりみず、ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信楽すれば、煩悩を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。（『唯信鈔文意』真宗聖典　五五二）

と語られる。ここに、平等の地平をうながしていく世界が窺えるのである。同時にこのことは従来述べきたった如く、本願一乗海にまで開かれた念仏成仏の宗をもって生死を果していく同一念仏者の地平を指し示しているものでもある。